



SLE合併妊娠の臨床像

天野, 真理子 ; 牧原, 夏子 ; 園山, 綾子 ; 鈴木, 嘉穂 ; 森本, 規之 ; 森実, 真由美 ; 出口, 雅士 ; 森田, 宏紀 ; 山崎, 峰夫 ; 山田, 秀人

(Citation)

日本周産期・新生児医学会雑誌, 46(2):472-472

(Issue Date)

2010

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001400>



PO-227 SLE 合併妊娠の臨床像

Pregnancy outcome in patients with systemic lupus erythematosus

神戸大学大学院医学系研究科外科系講座産科婦人科学分野

天野真理子, 牧原夏子, 園山綾子, 鈴木嘉穂, 森本規之, 森実真由美, 出口雅士, 森田宏紀, 山崎峰夫, 山田秀人

【目的】 SLE患者の約1/4が抗リン脂質抗体症候群 (APS) 合併であり, 流産や早産, 子宮内胎児発育遅延 (IUGR) などをきたすハイリスク妊娠である。SLE合併妊娠の臨床像を検討した。

【方法】 過去5年間に分娩管理を行ったSLE合併妊娠15人32妊娠を対象とし, 抗リン脂質抗体 (aPL) の有無に分けて妊娠転帰, 産科異常の有無を後方視的に検討した。

【結果】 SLE合併妊娠15人中6人 (40%) がaPL陽性であった。aPL陰性のSLE 9人17妊娠のうち, 自然流産6例 (35.3%), 人工妊娠中絶1例 (5.9%), 生児獲得10例 (58.8%) であった。一方, aPL陽性のSLE 6人15妊娠では, 自然流産5例 (33.3%), 死産1例 (6.7%), 人工妊娠中絶1例 (6.7%), 生児獲得8例 (53.3%) であった。生児獲得例で, aPL陰性10妊娠とaPL陽性8妊娠の分娩週数 (mean $\pm$ SD) は 38.1 ± 1.1 週と 32.5 ± 5.5 週, 出生児体重は $2,831 \pm 353$ gと $1,733 \pm 1,005$ gで, IUGRは1例 (10%) と4例 (50%) であった。妊娠高血圧症候群 (PIH) はaPL陽性妊娠の1例 (12.5%) のみに認められた。aPL陰性10分娩で血小板減少は認められなかったが, aPL陽性8分娩のうち3例 (37.5%) で血小板減少を認めた。aPL種類別の検討では, aPL陽性SLE 6人のうちループスアンチコアグラント (LAC) のみ陽性は3人 (50%), 抗カルジオリピン抗体 (aCL) のみ陽性は1人 (16.7%), LACとaCL両方陽性は2人 (33.3%) であった。LACのみ陽性3人4分娩での分娩週数は, 34 ± 5.5 週であった。aCLのみ陽性例は無治療で, IUGR, 胎児機能不全のため26週で分娩に至った。LACおよびaCL両方陽性2人3分娩で, 1人は無治療でIUGR, 胎児機能不全のため妊娠26週で分娩となった。残り1人はプレドニゾンと低用量アスピリン療法を施行し, 2分娩とも妊娠36週で分娩となり児の発育は良好であった。

【結論】 aPL陽性のSLE合併妊娠では, 流産, IUGR, PIH, 早産を発症率が高く, 特に無治療例では予後不良であった。SLEではaPL検索を行い, 陽性であった場合にはより厳重な妊娠管理が必要である。